

『オープンダイアログとは何か』 非構成的エンカウンター グループの豊かさ

著＋訳：斎藤環／定価：本体 1,800 円＋税
発行：医学書院／TEL：03-3817-5657



私は 30 年ほど前に非構成的エンカウンターグループに出会った。我と汝という実存的な在り方を志向し、メンバーのどんな発言にもていねいに耳を傾け、互いに深く出会っていくというグループイメージはとても魅力的だった。組織に人間中心の雰囲気をもたらし革新的なアプローチとして、「静かなる革命」とか「20 世紀最大の社会的発明」といった評価が寄せられ、教育、医療、福祉などに携わる多くの人々がこの方法に触れた。

しかし、今、非構成的エンカウンターグループを行う人や場所は少ない。実践家の多くは、構成的グループに移行していった。あらかじめグループのねらいや目的を明確化し、アイスブレイクやウォームアップ、出会いや気づきのワークなど多数の心理テクニックを用いて、決められた時間内に所定の効果をあげるやり方のほうが、学校や企業などでは歓迎される。

人生や生き方に決定的な影響をもたらす本当の何事かが起こるまで、非構成的なグループのプロセスのなかで、誠実に、待つという態度を堅持することは、難しいことなのだろうか。オープン・ダイアログの理論を整備したセイックラ教授は、エンカウンターグループにはなかった 3 つの観点を繰り返し強調している。

まず「不確実性への耐性」という概念によって、たとえやりとりが非生産的に見えようともよく耐

え、専門性を使って安易に操作せず、生々しい対話や関係性のあいまいさのなかに、果敢に存在し続けることのしんどさを“価値”として可視化してみせた。「対話主義」は、どんな不思議な発話、幻聴や幻覚であっても敬意をもって真剣に聴き、医学用語ではなく、患者や家族と心から共有理解できる新しい言葉を協力して生み出すこと。「ポリフォニー」とは、“ミーティング”と呼ばれる対話の場において、まったく異なる複数の主張も、その語られるままに聞き取り、あたかも一つの民族文化のようにみなして互いに存在し合い、治療目標や問題解決へ向かって導かないこと。これは従来の自他の区別や個人の尊厳といった視点より、全体的、関係存在的な視界である。

かつて、大学の人事課主催で、全学の課長クラスの職員を集めて、ありのままの対話を重視するグループを行ったとき、人事課長が「このグループは何を話してもいいんですか？ たとえ上司や大学の悪口でも？」と不安げな表情で確かめに来たことを思い出す。オープン・ダイアログを知った今なら、このように返事するだろう。「全員が同じ空間にいるということ、それぞれの話し方や仕草などに触れること、お互いに人間として関係をもつということが、何かを決めたり問題を解決することより大事なこともあります」と。教育現場で、つい忘れがちな視点ではないだろうか。